

幼児期における身体性再建の手法を探る

—— 野口体操のことばと手法より

Study of the Method for Restructuring the Body in Infancy:

from the Words and Methods of Michizo NOGUCHI

池田（尾畑）三鈴

IKEDA (OBATA), Misuzu

I. 序

子どもは、まず母親のからだから新たな「からだ」として生み出され、世界の中へ投げ出される。特に乳幼児においてはからだと世界との関りの中で、知覚や行動、欲求や情動、自己と他者の区別、言語や文化性を認識、獲得し、機能させていくといえる。発達心理学者の岡本夏木によれば、「子どもが世界をつかむための出発点は‘身体’というよりも‘身体性’と呼ぶ方が適切であり、特に遊びは身体性と密着して展開され、幼い子どもの遊びであるほど、身体性はその子どもの中心部分に参加している」という。つまり、からだを取り巻く感覚や他者をも含めた‘身体性’こそが、子どもが世界とつながる基盤であり、成長発達後もそれぞれの行為の中で暗黙的に働き続けていくというのだ。これは、幼児期における身体のとらえ方とその再建を促すための手法やことばを得る上で、基本的な考え方として位置づけることができる。

また、かつて子どもにとっての遊びとは、そのからだを介して自然と一体化したものであったが、生活が無季節になり無機格的になっ

ていく現代社会においては季節という自然の実感が薄れ、「子どもたちは身体的経験を奪われ、からだで実感する力を確実に弱めてきている」²と指摘する専門家も少なくない。中でも理学博士であり兵庫教育大学附属幼稚園の前園長であった山田卓三は、自然にあまり触れずに大きくなってきた子どもたちには、身体感覚を総動員して体得される「原体験」が大切であると主張している。しかし、これら専門家の指摘が多くなされているにもかかわらず、幼児期に身体性を育むための具体的な手法についての研究や実際的な実践は今のところほとんどなされておらず、開発されてきていないというのが現状である。

このような現状の中、学校教育の現場では保育現場に先駆けて1999年に保健体育科の学習指導要領の中に「心と体を一体としてとらえる観点」や「体ほぐしの運動」が導入され、子どもたちの現状を打破していこうという動きが活性化しつつある時期を迎えている。学校現場では、ボディワークの哲学やそれらの手法からヒントを得て実践されている例が数多く見られ、中でも東京藝術大学の名誉教授であった野口三千三によって創造された「野

キーワード：身体、ボディワーク、幼児、原体験
Key words : body, bodywork, infant, protoexperience

口体操」の手法は小学校をはじめとして数多く実践されてきた。野口体操が、学校現場で実践されてきた理由には、①具体的な「手法」を豊富に持つこと、②その手法をよりリアルに説明するための巧みな「ことば」を持つことの二点が挙げられる。特に、その独自性豊かな哲学を背景に生み出される数々の「ことば」は、単に動きの状態をことば化し、説明するという枠組みを超え、手法を巧みにイメージ化し、からだに滑り込ませる、いわば架け橋のような役割を果たしている。よってこれらの「ことば」は、からだに対する固定概念を崩しながら、ゆるやかにおだやかに個々の身体性の再構築を促す、まさに珠玉の「ことば」ともいえよう。拙者もまた、1999年より野口体操に関する過程で、その手法とからだをつなぐ「ことば」によってより豊かに引き出される身体性や新たに拓かれる身体感覚の面白さを幾度となく経験してきた。

そこで本稿では、幼児期の身体性を再建するためには、保育現場においてどのような「手法」と「ことば」を適用させるべきか、という問題意識から、幅広い分野で多くの信奉者を得、いまだ身体へのまなざしを啓発し続ける野口体操の「手法」と「ことば」を手がかりとしながら、その妥当性と適性について検討し、幼児期における身体性再建の糸口を手繰り寄せたいと思う。

<研究方法>

野口三千三によって記された著書ならびに語録に関する文献研究による。

<主要引用文献>

◇野口三千三『原初生命体としての人間』岩波書店 1996年（1972年初刊）

野口がその体操理論を記した最も古い著書であり、体操、身体、ことばについての哲学感が詳細に記された野口体操の教科書ともいえる書物である。

◇羽鳥操『野口体操 自然直伝 野口三千三語録』柏樹社 1999年

1998年野口没後、初めて刊行された書物であり、野口の残した珠玉の「ことば」の数々を、長年助手を務めた羽鳥が取りまとめ、より分かりやすく解説したものであり、野口没後の野口体操の方向性などについても触れられている。

<語義規定と表記について>

「身体性」について

人の身体についてはメルロ・ポンティをはじめ多くの哲学者や芸術家たちが身体論を展開しているが、本稿では、身体論におけること細かな身体の側面にはそれぞれフォーカスせず、あくまで幼児期の身体に対する基本的な考え方として岡本の「身体性」という言葉を引用する。また同時に、幼児期のボディイメージが部分的であるというよりも、むしろ全体的であるということを踏まえ、野口の「まるごと全体のからだ（身体の各部位を部分として解体せず全体のつながりの中で構成されるものとしてとらえるからだのこと）」の考え方を引用し、身体を「からだ」とひらがなで表記する。

Ⅱ. 幼児期の原体験と表象の特徴

1. 幼児期における原体験の特徴

原体験という語は、教育心理学や環境学習、理科教育の分野でそれぞれ異なった意味で用いられている。教育心理学では、原体験 = Original experience、すなわち「個人の生活

体験の中でその個人の人格形成を説明するのに無視することのできないあるまとまりをもった体験」とし、「戦争、大災害、冒険等いずれもその体験が自己形成の継続的な契機となっていること」（『幼児教育学辞典』）と定義している。また環境学習や理科教育の分野では、原体験は「生理的なレベルで身体に感じるような体験で、例えば暑いとか寒いとか、ヌルヌル、ベタベタなどの体験」或いは「人間の五感（視・聴・嗅・味・触）を使つての初歩的な体験」という意味合いで使用されているようである。その中で生物学者の山田卓三は、後者の意味合いを指示し、「原」を「最初の、主要な、原始の」という意味を持つプロト(proto)としてとらえ、原体験を“protoexperience”という造語で表し、使用している。そして原体験とは、「生物やそのほかの自然物、あるいはそれらによって醸成される自然現象を触覚・嗅覚・味覚の基本感覚を伴う視覚・聴覚の五官（感）で知覚したもので、その後の事物・事象の認識に影響を及ぼす体験」³と定義している。ここで定義される原体験とは、自然のしくみを理解するといった自然認識を目的としたものでなく、動物や植物、水や石や土等の自然物と直接触れ合うこと自体を目的とした直接体験を指しており、「学習を意図していない遊び」⁴とも言い換えられるものである。つまり、学習を意図しないことにより、自然に対する直接的な感動や興味、関心を呼び起こし、やがては知的好奇心へと連鎖していくというものである。よって、ここで山田が定義する原体験では、まさしく「子ども」「自然」「遊び」が一体化し、身体的経験が培われる体験のことを意味することがわかる。

さらに山田は、幼児期にさせたい原体験として、昔子どもたちが自然を相手にしていた

遊びの中から300種もの事例を挙げ、それらを「動物」「草」「木」「土」「石」「火」「水・雪・氷」を自然素材とした7つの原体験と寒暖や明暗、時間感覚などのゼロ体験（情感体験）に分類して紹介している。その中身を詳細に見ていくと、例えば、今日ではなかなか珍しいが「動物」の分類で紹介される「動物の糞を探す」といった内容が含まれているが、このテーマから連鎖的に引き起こされる原体験は、次のようなものがある。視覚・嗅覚・触覚・をふんだんに使いながら、草木を掻き分け、それらの感触にも触れ、土や石を掘り起こしながらその匂いや温度、重さを感じ、時間を忘れて夢中になってどこにあるとも知れぬ糞を探し回る……。これは拙者のイメージであるが、つまり、その奇妙な物体にたどり着くまでに、子どもは様々な感覚を同時に働かせながら身体的経験を獲得するであろうということ、そして、その過程そのものに原体験の本質があるという意味で大変興味深いものである。

2. 幼児期における表象の特徴

——オノマトペとイメージの有効性を中心に

幼児期の表象では、イメージが中心になり、「表現されるものとしての幼児のイメージの特徴は大人のイメージや概念に比べて、行動に根ざし、情動、感情に強く彩られている」⁵ことが分かっている。例えば、幼児期の絵が、大人の絵に比べて写実的には不均衡でもはるかに生命感や力動感、個性に溢れているのはそのためであるという。これは周知の通り、アミニズム的認識とも言われるもので幼児期にある子どもが無生物も心や意識を持っていると認識することによっている。また、これ

らのイメージは個人的経験から出発するため、極めて主観的であり、特に幼児期の場合、形あるものをとらえる時には、自分か関心を持っている何らかの具体的なもの、ことを表すものとして受け取るともいわれている。

また、幼児期は想像力が最も活躍する時期ともいわれ、親や先生が読み聞かせてくれる「お話」や絵本、テレビ等のメディアを通じた画像等も大きな影響を与える。幼児期の表象とイメージについて、岡本は絵本の事例から、幼児期はことばの発達が進むにつれて「絵をことばで補うところからことばを絵で補うところへ、つまり絵によるイメージとことばによるイメージの相互意味づけの方向が変化していく」⁶として、ことばの発達とイメージの補完関係が徐々に変化することについて明らかにし、両者の相互作用によってより深く奥行きのあるイメージの世界が形成されることを指摘している。つまり、絵やことば、音楽や動きなど様々な表現の手段を介して、異種のイメージ間の相互媒介を促すことが、幼児の内的表象の世界をより豊かで生き生きとしたものにするための手立てだといえる。

また透視画のように、実在すると心で思うものを表象するというのも一つの特徴である。さらには、イメージや表現以前の知覚的な感覚（五感）を超えた知覚が起こる現象も報告されており、例えば触らなくても見るだけでザラザラした感じや滑らかという性質を予想したり、音でなくとも光のパルスから同一リズムを発見したりすることができるという。また、色から寒暖差や音質から色調を感じ取ったり、異なる感覚同士や表象同士が一体化されて喚起される傾向が強いことが分かっている。また、田中の先行研究⁷によれば、幼児期（主に4～6歳児）においては、オノ

マトペや紙芝居によるイメージの刺激が表現を引き出す要因として有効であることが明らかにしている。

これら幼児期における表象の特徴を考察していくと、絵、ことば、音楽、動きなど異種のイメージ間を相互に行き来するような活動は、幼児にとってより適切であることが分かり、特に「質感」に関するオノマトペ（擬音語や擬態語）からの感覚の予想、絵本などによることばの視覚からのイメージは、子どもの中でより豊かに知覚され、表象同士を一体化させて豊かに喚起するということが分かる。

Ⅲ. 野口体操の特徴と着目理由

1. 野口体操概略 ——創始から現在まで

野口体操は東京藝術大学の名誉教授であった野口三千三によって創造された体操であり、西洋の心身二元論的な身体観に対するアンチテーゼとして生み出された。野口は第二次世界大戦の末期、東京体育専門学校（後の東京教育大学体育学部）の助教授であったが、敗戦により強い兵士づくりを目指す体育観が一挙に崩れ落ち、茫然自失の中自然生命に基づく体操のあり方を模索し続けたという。1949年には、東京藝術大学の助教授として迎え入れられ、当時この体操は芸大の音楽学生をはじめとし新劇界や教育界にも認められ多くの芸術家や教育家を啓発した。中でもメルロ・ポンティの身体論に強く影響を受けた演出家の竹内敏晴は野口体操からも多くの影響を受けている。

また1999年、保健体育科の学習指導要領の中に「心と体を一体としてとらえる観点」や「体ほぐしの運動」が導入されたことにより、一気に身体ブームが教育界に駆け抜ける中、『子どものからだと心 健康教育大事典』（健

康教育大事典編集委員会編、旬報社、2001年)に野口体操の基本運動である「腕ぶら」「寝によろ」「によろ転」「によろ転から後ろまわり・前まわり」「頭で立つ逆立ち」などが掲載されたことにより、現場の実践例として積極的に取り上げられるようになった。

さらに近年では、『声に出して読みたい日本語』の著者である斎藤孝や小劇場ブームの第三世代を築いた劇作家であり演出家である鴻上尚司(第三舞台主宰)や脳解剖学者の養老孟司等の人気作家がその著書で野口体操をとりあげた事により教育界のみならず、哲学界、芸術界ほか身体を取り巻く様々な分野で再び静かなブームが巻き起こしている。

このように、もともと芸術を専攻する学生を中心に教授されていた野口体操であったがその万人のからだに通じる哲学の魅力に引き寄せられた人々の中で息づき、分野を問わず伝播していったといえる。そして1998年、創造主を亡くしてから十年を経た現在も、未だ進化・成長をし続けている体操といえる。

2. 野口体操における体操のとらえ方

体操という名称が認識の上での混乱を招くため、ここでは野口体操における体操の定義について触れておく必要がある。野口体操は「体操」という名称でよばれるが、実質的には、心身一元論的な哲学や東洋的な身体技法との類似点からボディワークの括りとして扱われることが多い。その定義について、野口は著書『原初生命体としての人間』(1972年初版刊行)の序文の中でみずからの体操に枠をはめたくないとしながらも、体操への考え方、定義について次のように書き記している。

「私は、自分自身の生身のからだの動きを手がかりに、今ここで直接、体験するからだ

の中身の変化の実感によって、人間(=自分)とは何かを探検する営みを、体操と呼んでいる。自分というまるごと全体の生きものが、そっくりそのまま実験研究室(アトリエ)であり、研究材料(素材)であり、研究者(制作者)でもある、というあり方である。」⁸

「自分の中になる、大自然から分けあたえられた自然の力により、自然の中にある、大自然から分けあたえられた自然の素材によって、自分という自然の中に、自然として新しい自分を創造する、そのような営みを体操と呼ぶ。」⁹

「『人間の一生における可能性のすべての種・芽は、現在の自分の中に存在する』と考えて、今自分自身の中にもっていながら、自分を含めて誰も気づいていない無限の変化発展の可能性を、自分自身のからだの動きを手がかりとして、それを発見して育てることができる」¹⁰

以上のことばからも明らかであるように、野口体操は、人間の裏(なか)にある「自然」に直(じか)に貞(き)くことをからだの動き、すなわち体操を通して問い続けるものであり、自分自身のからだの動きを手がかりにして感覚をひらき、自然から賦与された無限の潜在的可能性を引き出すことを目指そうというものである。中でも最も注目される点は、体操の本質を、単に身体を鍛え、目的を果たし、成果をもたらすためのものという従来の観念から解放し、心身一元論的な発想からとらえ直したことである。そしてさらに、「体操による人間変革」¹¹とも述べられるように、人間とは何か、人間の一生における可能性を探求するという体操という領域を遙かに超えたスケールをも孕んだ壮大な探求の旅のようなイメージでとらえたことである。

3. 野口体操への着目理由①

——幼児期における原体験との共通項より

第Ⅱ章でも明らかであるように、幼児期における原体験の本質は、「自然」と一体化した遊びの中に潜み、その中にある身体的経験を通して獲得されるものである。しかし、そうした原体験をうながす保育現場における「自然」という環境の設定は、特に都市環境にある保育園や幼稚園では難しい場合が少なくない。子どもの生活の部分としての原体験を獲得するためには、ある種人工的な生活環境の設定が必要であるようにも思われる。しかし、ここで山田の「生物やそのほかの自然物、あるいはそれらによって醸成される自然現象を触覚・嗅覚・味覚の基本感覚を伴う視覚・聴覚の五官（感）で知覚したもので、その後の事物・事象の認識に影響を及ぼす体験」という原体験の定義を思い出す時、そこに含まれる「生物」「五官（感）」「認識に影響を及ぼす体験」などの語からは、その対象が自然の一部としての「からだ（人間）」であってもよいのではないかと、むしろその重要性が忘れられていないかとも思われるのである。そこで、自身を自然の一部と説き、五感を解放し、自分のからだの動きを探求する営みを体操として位置づけた野口体操の数あることばと手法の中から、幼児期に重要な原体験との共通項を一つの方向性として、その視点から、適切なことばと手法の抽出を行なえるのではないかと考えた。

そこで、野口体操への着目理由として原体験との共通項を抽出してみると次の四つの内容が考えられた。

① 「自然」と一体化しその中に身体が溶け込むように感覚を働かせる点

② それ自体が目的であり、目的を設定しない点

③ 感覚を全体的に同時進行でバランスよく、多重奏的に作動させる点

④ 感覚を鋭敏化させ、無心で行う点

この両者の間に発見される共通項は、幼児期における活動の特徴とも言い換えることができる。子どもの活動において重要な立場として、この立場を脅かさない理論と手法を抽出することが重要であろう。

4. 野口体操への着目理由②

——幼児期における表象との共通項より

ここで再び、幼児期における動きの誘発に適切な刺激として、田中の実証するオノマトペや絵本等の視覚資料による刺激の有効性や、幼児期における表象の特徴を認識した上で考えると、野口体操の適用性が明確にみえてくる。

特に、オノマトペを用いて誘発される動きや、道具を介して提示される動きのイメージは、ことばとうごき、ものと動きといった具合に、異種のイメージ間での相互媒介が促される事を意味し、子どもの表象形態に見合った題材として考えられる。また触らなくても見るだけで、例えばザラザラした質感を予想できる力を子どもはすでにもち合わせていることから、野口体操においてオノマトペの使用や動きのイメージを的確にとらえた造語（例えば「による転」など）は、幼児期にある子どもにとっても理解の域にあるといえる。また、透視画に代表されるように、目に見えないからだの中身についてイメージすることが得意な幼児期において、直接的には見えないからだの中身を、あるイメージをもって覗き込み、探求しようとする野口体操の手法は、

実に子ども向きともいえるだろう。

しかしここで注意しなければならないのは、この性質は野口体操の一部分であり、そのことばやイメージ、動きの内容は、実に多岐に富み、幼児には難しい内容も多数含まれているということである。野口体操の全てを引用することは困難であるが、これまでに明らかにしてきたとおり、中には幼児期における表象との共通項には大変興味深いものがある。よって、今回その引用の適用性の是非を考察し、分析する内容以外のものについては、引き続き、妥当性と引用の可否を丁寧に検討し、幼児に適切な題材を抽出する作業が不可欠であると考えられる。

IV. 野口体操の引用における有効性の検討

野口体操は別名「イメージ体操」と評されるほど、その独自性溢れることばによって、からだの中にさまざまな新鮮でみずみずしい動きのイメージが注ぎ込まれる。「動きのイメージは、分析的なものではなく、動的で、ある方向感をもつ流れであり、総合的な直感によって創造された生きものである」¹²という言説からも明らかであるように、そのイメージを喚起させるためのことばは、非常に独特のリアリティを伴い、珠玉のことばとも評されるほどである。

野口は、「体操の特質は、人間が言葉や文字、頭の中だけで分かってしまったかのように思い込んでいる事柄を、自分のからだによる生体実験によって、皮膚を含めて、その内側の全感覚で見つめ・味わい・確かめ・計算し・考え・納得し・判断し・行動することにある。そして、このことが単なる言葉の遊戯でなく‘実感’としてつかめるようになったときに、体操がはじめて人間のために役立つものとな

る。体操が皮相的な技術に終わったり、知識としてだけの理解に終わるものであるならば、それが人間にとってどれだけの意味をもちうるか、極めて疑問である」¹³として、「皮膚を含めた全感覚」による「実感」を中心に据えた動きの探求であると述べている。

そこでここでは、主に「実感」、「ことば探し」に関するものを取り上げながら、野口体操の引用における有効性と、その幼児への適性について検討する。

1. 野口体操における「実感」のつかみ方より

はじめに、野口体操において最も基本的なからだのイメージに関することばは次のとおりである。

「からだの基本構造は、皮膚という薄くて柔らかく、伸び縮み自由な大小無数の穴が開いている自他の界面としての複雑きわまりないたったひとつの生きた袋、その中に液体がいっぱい、その体液に骨や筋肉・内臓・脳などが浮かび、浸り、^{ただよ}漾い、揺れ動いている。」¹⁴

このことばは、1972年に『原初生命体としての人間』の初版が刊行されて以来、変わらず野口体操の基本哲学の根幹を担うからだへのイメージとして、度々引用されてきたものである。その基本哲学とは、からだを液体であるとイメージする事によって、からだはもとより精神や息（呼吸）をも解放しようとするものであり、身体を部位や筋肉によって認識するのではなく「まるごと全体のからだ」としてより流動的に、固体ではなくより液体的に認識することでからだへのまなざしを根本的に変換し、からだがもつ潜在的な動きの可能性を引き出そうというものである。それでは、他に示される「イメージ」には具体的

にどういふものがあるのか。例えば次のようなことばは幼児を対象とした場合、興味深い内容として取り上げる。

「もう一人の自分が外に出て、上から、頭の天辺を通してからだの中を下に見てゆく。まっすぐに立っていれば、そしてからだは空気の丸い柱（真空の丸い柱）であれば足の裏を通り地球の中心が見える。」¹⁵

「‘おしっこ’が出たくてたまらない時の実感は解放（空いている・分ける）の逆で、可能性の最も少ない状態の適例である。通じを塞いでいる状態である。これを‘おしっこ出たい型’とよんでいる。便秘、鼻づまり、息が詰まる……これらは通じのよいの反対の‘詰まる’の実感をつかみやすい。」¹⁶

これらのことばからは、野口体操では「からだの中身」を実感するために、まず、からだそのものに対する固定観念を崩すことば、つまりからだを液体としてイメージ化させることばを投げかけ、それにさまざまなかからの見方に関することばを多重奏の如くイメージの中へ潜り込ませる手法が用いられていることがわかる。そしてこれらのことばによるからだのイメージ化は、実践する者からだとの新鮮な対峙の仕方を提示しようとしているといえる。

2. 野口体操における「ことば探し」「動きの描写」より

野口は、「語源探検の営みは、コトバの内部構造・内部機能を探検し、自分の納得する言葉にするためのものである」¹⁷として、言葉の語源・字源探求を頻繁に行い自身が納得し、また時には他者とその理解を共有する術として活用している。ここでは、主に野口体操で引用されるオノマトペ（擬音語・擬態語）を

中心に挙げ、動きの描写とイメージが如何にして引き出されていくかを明らかにする。

野口は中でも、不快動物（ナメクジやイモムシ・ケムシ・ウジムシ・ミミズ・ヒル・ゲジゲジほか）のもつその独特の生態と動きに人間の動きの原初生命体の動きを想起させ、不快動物の「それぞれのすばらしい動きに、限りない魅力と美しさを感じる」¹⁸と述べるほどであった。特に、その様子や動きなどから感じ取られるオノマトペを「理屈を超えた強烈な不快感とエネルギーをもつ」¹⁹ことばとして注目し、そのことばの持つ強烈なエネルギーの所在を探りながら、分析し、自身の動きの描写に役立てているようである。それらをいくつか挙げると以下のようなものである。

「がさがさ、ごそごそ、ざわざわ、ぶつぶつ、どろどろ、ぶよぶよ、じめじめ、じとじと、ぐじゅぐじゅ、ぐちゃぐちゃ、くちゃくちゃ、ぎらぎら、きらきら、てらてら、つるつる、によるよる、ぬるぬる、ぬめぬめ、もやもや、ふわふわ、……。」²⁰

このようなことばをなぜ、取り上げてみるのか。それは、「どのことばもいろいろな不快現象の中にひそむ、それぞれ‘特有な感じ’をもつ‘何か’である。（中略）‘がさ’とか‘どろ’は重ねないとどうもぴったりこない。ふつう二回重ねることが多いが、感じの中では、大きく小さく入りまじって無限に続くのである。」²¹という考察からも明らかである。つまり、「特有な感じ」を表すものに、ことばを当てはめるためには、特有のものに潜む関係を見極めるためのことば探しが必要不可欠であり、その作業を通してはじめて、適切なイメージが内包されたことばが発見されるということであろう。野口はこれを「原初意味論遊び」と名づけていくつかの事例を挙げて

おり、このようにできるだけ多くのことばを挙げ、それらを整理・検討することを手がかりとして「事の本幹・実態・本質」を探ろうとしたのである。

こうした「原初意味論遊び」は、結果として野口体操における動きの名づけにも現れている。野口体操における動きの名称は、「寝によろ」や「によろ転」「ふんわべったり」「おへそのまたたき」に代表されるように、オノマトペとも造語ともいえることばで名づけられている場合が多く、それぞれの動きがもつ「特有な感じ」を最大限に伝えることのできることばが探究され、選ばれ、あてはめられてきた。これらの動きの名称は、体操を実践する者により本質的で具体的な手法のイメージを刷り込む役割を果たす。つまり、体操を行なう者は、その動きの原理を詳細に理解する前にことばのイメージでおおよその感じをつかみ、感覚的に実感することからはじめればよいのである。

そして、これらのことば探しから考えさせられるのは、何かの模倣や形態模写など、保育現場において子どもがイメージをもって動いたり、歌う活動を行う場合、よく「○○のような感じで」などと比喻することが多いが、この場合も実はことば化された時点で「○○」ということばの既成観念にとらわれてしまい、そのものやことの本래の質感や実感とは異なる別物を表すことになってしまいかねないという危惧である。では、子どもそれぞれから、個々が実感したものやことが、その内観から溢れ出し、既成観念にとらわれない、つまり一定化されない個々の独自の世界が引き出されるためには、どのようなことばでイメージをサポートすることが望まれるのか。その答えは明確ではないが、野口の手法にある「こ

とば探し」と「動きの描写」は、もの・ことの本質を探究する具体的な方法として大変参考になるものと考えられる。

さらに、イメージに関する野口のことばを辿ると、次のようなものが挙げられる。

「イメージとは、内的で流動的な現象であって、ある対象について、意識にのぼったものとしてとらえられたものだけでなく、半意識・無意識のものとして感じとられている多くのもの、漠然とした感じにさえならないもっとも多くの何か、そのすべてを含み、それらの全体から生まれてくる抽象的・模型的(模式的)そして未来像的な全体像をいう」²²

これは、意識にのぼったものだけをイメージの全てとして受け止めるのではなく、それはごく一部であり、そこにのほりきらない多くの部分があるという前提を意味し、そしてそれらから浮かび上がる全体像は可塑性に富んだものとしてとらえるべきであることを示唆するものである。つまり、ある固定的なイメージをもつのではなく、それはある動きについてはごく一部分でしかないという前提をもつことで、動きのもつ世界観や容量は大きくなる。こうしたスタンスをもつことで、ひとつの素朴な動きにおいてもさまざまな可能性と解釈を可能にしていくことができるといえよう。そして動きのイメージが「命のない空疎なもの」²³「観念によってみずからを疎外するもの」²⁴にならぬためにも、保育現場における「ことば探し」や「動きの描写」においても同じようなスタンスが求められるにちがいない。

よって、野口体操引用の有効性は、こうした「ことば探し」や「動きの描写」を探究する点においても、見出すことができるのではないだろうか。指導においてはこのようなス

タンスでのことば探しがより豊かな活動へと結びつくといえよう。

V. 引用における教育的意義の検討 ——引用される手法への考察から

前述したとおり、これまで学校現場で引用されてきた野口体操の手法は、数多くあり、中でも、「からだの中身を実感する」、「他者のからだを見ることを通して自分のからだを客観化する」、「人との肌の触れ合いを通して他者との連続性を発見する」ための手法は、その教育的意義からもより多く実践されてきた。

ここでは、これら学校現場において多く実践されてきた手法への詳細な考察を通して、幼児を対象とした場合の教育的意義について検討する。

1. からだの中身を実感すること

——「からだとの対話～寝によろ」より

野口の述べるからのイメージを如実に実感させることができる実技例として「寝によろ」を紹介する。前述したとおり、野口体操においては、「生きている人間のからだを、皮膚という生きた袋の中に液体的なものがいっぱい入っていてその中に骨も内臓も筋肉も脳も浮かび、^{ただよ}揺れ動いているもの」としてイメージし、その基本イメージに基づきながら動きを行なっていく。そこでまず問題として考えられることは、幼児期にある子どもがこの液体的なからだのイメージを明確にもつことができるのか、つまり物質の三体（固体・液体・気体）の違いと自身のからだとを見比べて比較することができるのかということである。身近にある物質「水」を例に挙げて、説明をするなど、導入としての工夫が必要であろう。しかし、大人の場合でも、はじめに

このイメージを的確に持つことができず、実践を通してなんとなく「なるほど!」や「なんだかそんな感じがする」といった気づきがあるケースも多々見受けられる為、はじめの段階で明確にイメージができるかどうかをシビアに問題視する必要はないと考えられる。

また、幼児を対象とした手あそびの活動と同様、はじめに二人組で保育者が明確に見本を見せてやり、活動のイメージをはっきり明示してやる必要がある。また活動のリードを促す保育者と、活動の方法がうまく理解できない子どもに対して適宜サポートに入れる保育者とにあらかじめ役割分担しておくのがよいだろう。

そこで、いよいよ実験であるが、方法は以下の通りである。野口の方法に従い、忠実に再現する。

- ① まず二人ペア（A・B）になる。
- ② Aが仰向けに寝る。なるべく力を抜いて楽に、全てを地球（床）にまかせ、空気にひたりにきた感じで。
- ③ BがAの両足をそろえて足首を持ち、十センチほど持ち上げ、左右に五センチほどゆするように何回か動かす。この場合Aが力を抜いて完全に休んでいるならば、またBのゆすりが適当であるならば（ゆするテンポがおそすぎるといけない）、Aのからだは全身のすみずみまで動きが伝わり、ニョロニョロ、フワフワと波のように揺れ動くだろう。
- ④ 「皮膚という薄い柔らかい伸び縮み自由な大小無数の穴によって外界と通じあっている複雑きわまりないたったひとつの生きた袋の中に液体的なものがいっぱい入っていて、その中に骨も内臓も浮かんでいる」という実感をゆすられるAはからだの中の

ある実感として、ゆするBは視覚とゆする手を通じての実感として感じ取ることができると思う。²⁵

こうした実践の内側には、相手のからだを通して自分のからだを感じるような体感も含まれている。つまりこのたった一つの生きた袋、体液にとっぷりとつかって生きている筋肉、骨、脳、内臓、その多重構造の生きものの全体が自分なのである²⁶。

この「寝による」において面白い現象は、パートナーに揺さぶられた瞬間、自分のからだの動きのあまりの予測不可能さに、思わず「笑って」しまう人が多いことである。自分自身の動きであろうその動きが本人が最も以外であったと同時に、その奇妙さが恥ずかしさになり思わず笑ってしまうしかない、という感覚であろうか。拙者が実践を行なった対象者は保育士養成課程にある大学生約80名であるが、そのうちの約八割以上の学生から笑みがこぼれていたのが印象的であった。このくすぐったいような「寝による」の体感、新感覚とも言うべき驚きと発見に満ちていることは確かである。

2. からだを客観的にとらえること

——「生卵との対話～見る」より

この実践では、生卵を題材として用いてその動きや状態の観察から、その内部へイメージを馳せ、動きの質感についての実感を得ようとするものである。理想としては一人につき一個の生卵と、保育者の見本用のゆで卵一つを準備する必要がある。実践においては、子どもに見せる場合は、全ての子どもがその様子を観察できているかをよく確かめながら、ゆっくりあせらず進めていくことが重要であろう。「見る」は観察し、感じ取ることである。

子どもの様子から感覚を研ぎ澄ませているようすがみとれるかを確かめながら行う必要がある。以下、野口の手法に従い、忠実に再現する。

① まず、「ゆで卵と生卵を一目見ただけで見分けることができるか？」という質問を投げかける。野口によれば、よく見比べてみれば卵の艶がまるで違うという。つまり、ゆで卵は死人の肌をしており、生卵には生きもの特有の生気が感じられるというのである。突拍子もない質問であるが、題材となる卵について「疑問」を持つことによって活動の入口に立たせているように感じられる。

② ゆで卵と生卵を同時に絶て、そっと放す。当然二つの卵はたおれ、くるっ、くるっと揺れ動く。この動きをくらべて見ると、明らかにゆで卵の方の動きが大きく、長い時間揺れ動き続ける。生卵はすぐに動きをやめて止まる。

③ 次に、ゆで卵と生卵を別々に横に寝せたままひねって回してみる。ゆで卵は軽快にくるくるとよく回る。快適である。生卵をまわしてみるとどうもよく回らない。(中略) もどかしさを感じる²⁷。

④ 次は、生卵をそのままそっと立ててみる(中略) 普段寝ているものが立つということの意味をこれほどはっきり感じさせてくれるものはない。(中略) 中身は力んでおらず、流動体のままである(中略) たとえ床に接するのはただ一点であっても(中略) ただそこにすっと立っている。²⁸

この実践では「見ること」からうける実感の差を絶妙に比較することに重点が置かれる。そしてその違いがどこから来るのかを考えてみることである。いうまでもなく、それは中

身の状態が液体か固体かの違いであり、この事実からは、外からの形態が同じでも、中身の状態の違いによってこれほどまでに動きが異なることを、ただ「見ること」から学び取るのである。

3. 他者のからだと連続すること

——「包助～触れる」より

野口体操では二人ペアになって行なう動きがいくつかあるが、その際にパートナーに触れる場面が数多く出てくる。野口は、これらのパートナーとの協力のあり方について、「人間関係のあり方や、人間そのものの感じ方、考え方、信じ方のすべてにわたる人間の生き方にまで深くかかわってくる力をもつものだ」²⁹として、体操にはこうした重大な問題が根底の部分に潜んでいることを示唆する。例えば、逆立ちの場合、「二人がお互いに相手を本当に信じ、任せることができるようになると、警戒的、意識の集中の状態を脱し、依頼の意識も消え、融合してゆとりの状態に入る」³⁰、という。さらに進んで、協力のあり方がだんだん進んでくると、「協力」ということばや「相手と一体になる」ということばさえ、一体となろうとする意識の臭みを感じていやになる。相手の立場に立って、自分がやるような気持ちで、相手と一緒に同じ息をする。相手の流れと同じ流れに乗って、溶け合ってしまったくひとつのからだとなる」³¹というのだ。野口体操においては、こうした動きの補助を「包助」と呼んでおり、二人以上の協力によって始めて何かができることの意味には一人で成し遂げることと質的に大きな違いがあるという考え方のもとで、動きを助けていくというスタンスを示す。

この逆立ちの例でも明らかであるように、

「触れる」ことにより、パートナーのからだの実感に近づき、感覚的に対象の中に入り込もうとするとき、他者であり非連続であったパートナーのからだと自分のからだが一體一如となり、連続的に感じられるという錯覚を呼び起こす。そして「今、ここ」に新しい何かが起こりつつあるという実感を与えるのである。それは、「生きていること」の実感でもあろうし、他者を感じとることのできた社会的な生物としての「よろこび」でもあるだろう。

VI. 結 語

本稿では、無機化社会の中で忘却されつつある子どもの身体性を再建させるために、何かよい手法はないかという問題意識から、野口体操のことばと手法を一つの手がかりとしながら、幼児期の身体性の再建の糸口を模索してきた。

今回の研究でまず明らかになったことは、原体験と野口体操の基本哲学にいくつかの共通項があり、野口体操を幼児期にあてがうことの妥当性をいくつか見出せたこと、そして、幼児期の表象形態として特徴的なオノマトペや造語の有効性や異種のイメージ間の相互媒介の重要性をふまえたとき、野口体操におけることばやイメージが、幼児に浸透しやすい性質を持ち合わせていたことである。そしてこれらの妥当性と適用性を裏づけとして、「からだとの対話～寝による」、「生卵との対話」、「包助～触れる」の方法を具体的な事例として検証し、紹介できたことは、一つの具体的な手法の提示として意味をもつものと考ええる。これらの手法では、からだを液体的にイメージ化することで新たなからだのあり方と出会い、対話していくことや、他者を見る

幼児期における身体性再建の手法を探る

ことを通した動きの原理や本質の学習、を知らず知らずのうちに体得し、固定観念に縛られない動きの可能性が拓かれることが、示唆された。

また、他者に触れ、その温かみや、自分との連続性を実感することは、幼児期のからだところにとって、大切な体験となるだろう。この野口体操の「ことば」と「手法」を手がかりとして、導き出される実感の体験が幼児期にある子どもたちに原体験の如く、蓄積され、身体性再建への道を拓く手法となり得ることが、今回の考察では明らかになったと思われる。さらに、野口体操における身体性は、人間関係のあり方や人間の生き方をも提示する側面をもち、教育的意義としても適切であるとも考えられた。

今後は、野口体操のことばによる身体性のとらえ直しが、子どもが生きるからだの世界、遊びの世界との架け橋となり、その入り口を切り拓く有効な手法になり得ることを視野に入れながら、実際的に子どもたちを対象とした実践を重ね、考察や留意点について実践研究を進めていくことを課題としたい。

- 8 野口三千三『原初生命体としての人間』岩波書店 1996年 p.iv.
- 9 野口 前掲書 p.v.
- 10 野口 前掲書 p.2.
- 11 野口 前掲書 p.5.
- 12 野口 前掲書 p.243.
- 13 野口 前掲書 p.4.
- 14 羽鳥操『野口体操 自然直伝 野口三千三語録』相樹社 1999年 p.112.
- 15 野口 前掲書 p.54.
- 16 野口 前掲書 p.54.
- 17 羽鳥 1998年 p.116.
- 18 野口 前掲書 p.64.
- 19 野口 前掲書 p.61.
- 20 野口 前掲書 p.68.
- 21 野口 前掲書 p.68.
- 22 野口 前掲書 p.244.
- 23 野口 前掲書 p.243.
- 24 野口 前掲書 p.27.
- 25 野口 前掲書 p.12.
- 26 野口 前掲書 p.224.
- 27 野口 前掲書 p.13-14.
- 28 野口 前掲書 p.16.
- 29 野口 前掲書 p.163.
- 30 野口 前掲書 p.164.
- 31 野口 前掲書 p.164.

注

- 1 岡本夏木『幼児期-子どもは世界をどうつかむか-』岩波新書 2005年 p.78.
- 2 岡本 前掲書 p.5.
- 3 山田卓三『生物学から見た子育て』裳華房 1993年 p.121-122.
- 4 山田 前掲書 p.122.
- 5 岡本 前掲書 p.142.
- 6 岡本 前掲書 p.148.
- 7 田中千恵「幼児の自由な身体表現を引き出す要因について」大阪教育大学教育学研究科（修士論文）2000年